

コラム②：4月に発生が予想される病害虫について

1 マンゴーにおける炭疽病の防除対策

本病の病原菌は花芽、花序、葉などにすでに潜在感染していることが知られており、収穫果実への被害軽減のため、袋がけまでの防除対策を徹底しましょう。

1 発生生態および被害

- (1) 葉、若い茎、新芽、花序、果実に発生する(図1)。
- (2) 未熟果で本病原菌は潜在感染(症状を示さない)して、収穫後、追熟とともに発生する。
- (3) 残さ上で長期間生存するため、伝染源になると考えられる。

2 防除上注意すべき事項

- (1) 罹病した新梢、残さは速やかに施設外に持ち出し処分する。
- (2) 袋がけ前までに登録薬剤を組み合わせたスケジュール散布を行う(表1)。



図1 果実の病徴

表1 登録薬剤を組み合わせた薬剤散布スケジュール(一部抜粋)

生育状況	結実期	果実肥大期		
		4月	5月	6月
散布月	3月	4月	5月	6月
薬剤	Kr	Kr	Kr	AZ

Kr:クレソキシムメチルDF(2000倍)

Az:アゾキシストロビン10F(1000倍)

2 にがうりにおけるミナミキイロアザミウマの防除対策

今後の気温上昇に伴い、にがうりの施設栽培において、ミナミキイロアザミウマ(図2)の発生が増加すると予想されます。収穫果実に奇形やケロイドを引き起こし(図3)品質を下げるので、本種の防除対策を徹底しましょう。

1 発生生態および被害

- (1) 口針を植物に刺して吸汁したり、植物内に産卵して組織を傷つける。
- (2) 卵は植物の組織内に産み付けられるため、表面から観察することはできない。
- (3) 寄主範囲が広く、野菜のみならず雑草でも増殖することが知られている。

2 防除上注意すべき事項

- (1) 施設開口部には目合いの細かい防虫ネットを展張し、本種の侵入を防止する。
- (2) 多発すると防除が困難になるので、発生初期の防除を徹底する。



図2 ミナミキイロアザミウマの成虫



図3 ミナミキイロアザミウマによりケロイド状になった被害果(上:健全果、下:被害果)

コラム②：4月に発生が予想される病害虫について（続き）

3 とうがんにおける果実軟腐症の防除対策

例年、気温が上昇する時期にとうがん果実軟腐症が発生しています(図4)。とうがんの果実軟腐症は、収穫後時間をおいて果実内部が液化し、悪臭を放つ病害です。そのため正常果実として出荷した場合でも輸送途上や市場等で発症し、クレーム対象となってしまいます。下記の防除対策を徹底しましょう。

1 防除上注意すべき事項

- (1) 殺菌剤(銅水和剤)で予防する。
- (2) ハウスが高温多湿にならないように換気を行う。
- (3) 収穫に使用するハサミを次亜塩素酸などで消毒する。
- (4) 収穫や運搬する時には果実を丁寧に扱い、傷や汚れがつかないように注意する。



図4 出荷後に発病した果実